

4. 指導者の役割って何だろう? - ファシリテーターって何? -

1) 3つの役割

ひとくちに指導者といっても世の中にはいろいろな指導者がいます。例えば、スポーツインストラクター、お稽古事の先生、地域の指導者、何らかのリーダー、場合によっては学校の先生も指導者と表現されるかもしれません。

環境学習で用いられる指導者には、さまざまな名称があります。実はさまざまな場所でさまざまな呼び方をされているので混乱しがちですが、ここでは特に次の3つの名称の指導者について紹介します。

指導者 (インストラクター):

知識や技術を伝える役割を担います。

例: スキーの技術指導 (スキーインストラクター)
/ キャンプ指導 / 器機や用具の使い方指導 /
その他知識・技術の伝授



解説者 (インタープリター)

自然やさまざまな物事について解説する役割を担います。

例: ビジターセンターにおける展示や周囲の自然の解説 /
博物館の展示などの解説

* インタープリターという本来の英語の意味は、「翻訳者」ですが、環境学習では、解説員という使われ方をしています。単に技術や知識を伝えるだけでなく、自然の仕組みや物事について解説する人です。



進行役/促進者 (ファシリテーター)

環境学習の場を進行したり、促進する役割を担います。

例: ワークショップの運営 / 体験学習の進行 /
参加者自身の気づきを促す

* おそらく、この言葉が一番なじみのない言葉ではないかと思います。
しかし、参加体験型の環境学習をすすめる上で一番重要なのがこの役割です。ここでは、わかりやすく「進行役」という言葉で表現します。



さて、この3つの役割といっても、厳密に規定されているわけではありません。例えば、既に世の中には、インストラクターやインタプリターという名称の職業があります。しかし、実際行っていることは、インストラクターがインタプリターを兼ねていたり、インタプリターがファシリテーターやインストラクターを兼ねている場合もあります。大切なのは、こうした役割が発生するということを知覚しておく必要があります。

例：ネイチャースキーでブナ林に行こう！	
役 割	実 施 内 容
進 行 役 / 促 進 者 (ファシリテーター)	全体の流れをつくる 全体概要説明 参加者の声を導き出す
指 導 者 (インストラクター)	ネイチャースキーの技術の指導
解 説 者 (インタプリター)	ブナ林の解説

例えば、上のような場合、「導入」「展開」「ふりかえり」の流れをつくりだすのが促進者です。いわば司会進行のような役割です。次にスキーをはじめるときにスキーの技術指導をするのが、指導者です。そして、ブナ林についてブナ林の解説をするのが解説者です。

理想的には3人いて、それぞれの場面でバトンタッチできるとよいのですが、実際には1人の人が全ての役割を担っていたり、1人2役、2人3役の場合もあります。



ファシリテーター

インストラクター

インタプリター

2)進行役 (ファシリテーター)の心得

ここでは、最もなじみがないと思われる進行役 (ファシリテーター) についてさらに詳しく紹介します。

*ファシリテーター (facilitator) は、直訳すると、進行役、司会者の意味。

進行役 (ファシリテーター) とは参加者の心の動きや状況をみながら、実際にプログラムを進行していく役割です。進行役 (ファシリテーター) がいることにより、体験したことの意味が深められ、プログラムの意図や自分とのつながりがより鮮明になります。

人の行動が変わるための力は、外にあるのではなく、その人の内側にあります。進行役 (ファシリテーター) はその力を引き出す役割があります。



進行役 (ファシリテーター)の基本姿勢

- ・参加者の主体性を尊重し、操作的な言動はつつしむ
- ・どのような過程を経て現在の討議があるのか、そのプロセス全体を見て、理解しようと努める。
- ・開放的な雰囲気づくりに心がける。
- ・問題の解答を教えるのではなく、解決は参加者自身にまかせる。
- ・状況をみながら、適切な「手助け」を行う。

手助けする

例えば、何らかのワークショップを実施しているとします。そのとき、実施のルールが守られていなかったり、グループでの課題達成が難しいと判断されたり、ふりかえり、わかちあいが進んでいない場合、手助けするのが促進者の役割です。

このとき、気をつけなくてはならないことは、あくまでも参加者の立場を優先し、自分の意図を決して押しつけないことです。必要に応じて、迷ったときの道筋をさりげなく示すことがポイントです。

例：議論が袋小路に入ってしまったときの言葉

「なぜ、こう思ったのですか？」

「この意見についてどこに問題を感じますか？」

「今のこの状態のどこに疑問を感じますか？」

「こう解釈してはいかがでしょうか？」

ハプニングへの心構え

時には全く予想外のハプニングが起こる可能性もあります。特に環境学習の場合、参加者が主体ですので、予想外の展開は当たり前と心得た方が良いでしょう。

ハプニングが起こった時には、これまでの「過程」を思い起こし、問題への道筋を参加者自身がたどれるような言葉をかけます。参加者自身が問題点を確認できたあとは、解決に至るプロセスを見守って下さい。

大切なことは問題点を「発見」してもらい、「気づく」ことです。

環境学習の場がスムーズに流れるよう手助けするということは、自分自身をふりかえることです。他者をいかに受容できるかは、自分自身の度量を計るものです。立場に縛られることなく、いいと思ったものは取り入れ、指摘されたことは素直に見つめ、必要を感じたら改めていける柔軟な姿勢が求められます。

3) インタープリテーションとは

次にインタープリテーションについて、簡単に解説します。インタープリテーション (interpretation) というこの聞き慣れない言葉は、直訳すると、通訳という意味です。環境学習の場では、インタープリターを自然の解説者と意味づけています。

インタープリテーションとインタープリター

インタープリテーション

自然・文化・歴史(遺産)を分かり易く人々に伝えること。自然についての知識そのものを伝えるだけでなく、その裏側にある「メッセージ」を伝える行為。あるいは、その技能のこと。

インタープリター

インタープリテーションを実施する人。アメリカの国立公園のレンジャーには、インタープリターという職名を持つ人たちがいます。インタープリテーションを実施する人を広くこう呼びます。



インタープリテーションの6つの原則

インタープリテーションの技術と知識の教育・普及に20年間を費やしたアメリカのフリーマン・チルデンは、インタープリテーションの6つの原則を次のように唱えています。

「インタープリテーション6つの原則」

1. インタープリテーションは、参加者の個性や経験と関連づけて行う必要があります。
2. インタープリテーションは、単に知識や情報を伝達することではありません。
インタープリテーションは、啓発です。知識や情報の伝達が基礎ですが、啓発と伝達は同じものではありません。ただし、知識や情報の伝達を伴わないインタープリテーションはありえません。
3. インタープリテーションは、素材が、科学、歴史、建築、その他何の分野であれ、いろいろな技能を組み合わせた総合技能です。技能であるため、人に教えることができます。
4. インタープリテーションの主な目的は、教えることではなく、興味を刺激し、啓発することです。
5. インタープリテーションは、事物事象の一部ではなく、全体像を見せるようにするべきものです。相手の一部だけでなく、全人格に訴えるようにしなければなりません。
6. 12歳くらいまでの子どもに対するインタープリテーションは、大人を対象にしたものを薄めて易しくするのではなく、根本的に異なったアプローチをするべきです。大きな効果をあげるためには、別のプログラムが必要です。

インタープリテーションについて、さらに詳しく知りたい方は、次の本をお薦めします。インタープリテーションについては、下記の書籍より引用させていただきました。

インタープリテーション入門-自然解説技術ハンドブック

著者: キャサリン・レニエ/マイケル・グロス/ロン・ジーマン

監訳 解説 日本環境教育フォーラム

発行 小学館 1994年 1,600円